

2025

9

令和7年9月10日発行（毎月1回10日発行） 通巻385号

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

とあるお



公益財団法人
さわやか福祉財団



いそがい・助け合い オンラインフェスタ 2025

すべての人が幸せに
暮らせる社会へ

目指せ 地域共生社会

〓 今こそ多様につながり、出番づくりを進めよう! 〓

参加お申し込み受付中!

誰もがいきいきと地域とつながりながら暮らしていくために、どう取り組みばよいのか。今年もすばらしい登壇者の皆様をお迎えし、各分野の具体事例をもとに、住民が主体的に参加する地域共生社会の実現に向けた多様なアプローチを学び合います。

開催期間 **10月14日(火)～10月23日(木)**

開催方法 **完全オンライン配信方式**

11月30日(日)まで、ライブ配信を除くすべてのプログラムが
アーカイブで視聴可能です。

(ライブ配信)

プログラム

オープニングフォーラム

特別トーク

学ぼう編

語ろう編

申込期間 **8月14日(木)～10月23日(木)** (最終申込日)

参加費 **1000円(税込)**

- お支払いは、クレジットカード、コンビニ決済、銀行振込からお選びいただけます。
- 参加費と同額を当財団の「地域助け合い基金」に拠出して、地域活動を応援します。

申込方法

当財団ホームページ内オンラインフェスタ特設ページから
お申し込みいただけます。

<https://festa.sawayakazaidan.or.jp>



お申し込みは
こちらからも

◎プログラムは、20ページをご覧ください。

総合お問い合わせ

公益財団法人さわか福祉財団
オンラインフェスタ2025事務局

メール festa@sawayakazaidan.or.jp

電話 (03) 5470-7751
(平日 9:30～17:30)

視聴に関するお問い合わせ

株式会社ストラーツ内

電話 (0120) 197-585
(平日 10:00～18:00)

とある

2025年9月号

CONTENTS

2 新しいふれあい社会 実現への道

いきがい・助け合いオンラインフェスタ 2025

地域参加・地域づくりのヒントが満載！

ぜひご参加お待ちしております

清水 肇子

4 広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から

事業を活用して住民が活動立ち上げ

助け合い活動の拠点となる居場所

ほずのいえ&ご近所すけっ隊（岩手県九戸村）

10 いきいき わくわく 子どもと一緒に地域で輝こう

専門職がボランティアで子育てを応援

NPO法人みんなで子育てこもれびひろば（石川県白山市）

18 シリーズ 定年、その先へ 一地域とのつながり方 5

大手広告代理店から地域包括支援センターへの転職

一般社団法人定年後研究所所長 池口 武志

新しいふれあい社会づくりに向けて

14 「地域助け合い基金」

助成先のご紹介／状況のご報告

22 ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・
ご寄付者の皆様のご紹介

23 NEWS & にゅーす

31 活動日記（抄）

20 「いきがい・助け合い

オンラインフェスタ 2025」のご案内

㊦ みんなの広場 / 投稿募集

㊧ さわやかパートナーのご案内 / 表紙絵から

助け合いを広げよう！ 新・ひとりごと・比嘉 政浩

いきがい・助け合いオンラインフェスタ 2025 地域参加・地域づくりのヒントが満載！ ぜひご参加お待ちしております

さわやか福祉財団 理事長 清水 肇子

3回目となる「いきがい・助け合いオンラインフェスタ2025」。毎年大変好評をいただいております、完全オンライン配信方式で、10月14日（火）～10月23日（木）に開催します。

みんなで住みやすい生き生きとした地域社会をどうつくっていけばよいのか。「いきがいと助け合い」を柱のコンセプトとして、皆で情報を共有し学び合おうと取り組んできたこのフェスタは、その前の「いきがい・助け合いサミット」から数えるともう足かけ7年になる。

この間、コロナ禍という大変な社会状況の中で、「つながり」の価値が改めて問われてきた。その一方で、AI（人工知能）は日々飛躍的な発展を遂げており、日本でも社会のデジタル化が急速に進んでいる。

変わるもの、変えるべきものに目を塞がないようにしたい。しかし、時代が変わっても、人が人として尊厳ある暮らしを望む中で、変わらぬ普遍的な価値というものもある。地域づくりにおいては、それは主体性であろう。住民自らが主体的に関心を持ち、参加するからこそ、い

きがい生まれる。ありがたいと交わし合う言葉に自分の存在価値を見いだす。年齢に関係なく、たとえ認知症であっても、それは何ら変わらない。

フェスタの基本テーマは「すべての人が幸せに暮らせる社会へ 目指せ地域共生社会」だが、今回は、地域社会とのつながりと参加をより積極的に見据えて、今こそ多様につながる、出番づくりを進めよう！を副題とした。職務として地域づくりに関わっている立場であってもやはり「参加」がキーワードとなるだろう。前例を踏襲した受動的な仕事のやり方ではうまくいかず、ストレスがますます溜まるだけではないだろうか。決まった答えがない中では、一人でもがいている苦労より、共に考えるという参加の輪に入ることが一番だ。共に悩み、共に笑いながら、答えを探していくこと自体が喜びになる。

ただし目標への適切な実践には、やはり正しい今の知識と多様な情報に接することが不可欠となる。そのための学びの機会として、全国の意欲ある皆さんを応援するのが本フェスタであり、今回もその趣旨に賛同を得て本当に素晴らしい出演者の皆さんにご協力いただいた。オープニングフォーラムでは、つながりやふれあいの価値を脳科学の視点からも語っていただく。また、学ぼう編では、経験の少ない人にもわかりやすい基本知識と事例を紹介する。語ろう編は双方向の意見交換を含めた実践的なプログラムだ。合わせて11コマ、居場所から有償ボランティアの生活支援、助け合いの評価の考え方等々、いずれも地域参加と地域づくりの実践で押さえておきたい内容を設定した。さらに特別トークは、社会の最新情勢や知識を簡潔に学べるフェスタならではのもの。地域デビューを考えたい人にも大変参考になるはずで、この機会を逃してはもったいない。ぜひ皆さんのご参加をお待ちしています。

**事業を活用して住民が活動立ち上げ
助け合い活動の拠点となる居場所**

ほずのいえ&ご近所すけっ隊
(岩手県九戸村くのへむら)

岩手県北部、豊かな山林に囲まれた九戸村は人口およそ5000人、高齢化率は約47%と少子高齢化の最前線に立つ村の一つ。村民同士の支え合いが欠かせない状況で、住民がじっくりと話し合いを続け、自由な居場所とそこを拠点とする助け合い活動を楽しみながら進めています。

（取材・文／境 朗子）

（取材・文／境 朗子）

九戸村・伊保内の商店街にある「ほ
ずのいえ」。ガラス窓に貼られた『誰
かと話したい 日中一人でつまらない
な ここに來れば誰かがいます 寄つ
てみてください』というキャッチコピー

ーに思わず引きつけられる。ドアを開けると、柔らかな日差しが差し込む部屋で、タオルを首に巻いたりエプロン姿だったりと普段通りの姿でのんびりくつろぐシニアたちがいた。



「はず」とは仏教用語由来の方言で“本性、正気、知識”等の意味。昔からこのあたりで「伊保内の市日さ行ってはず買ってこい」などと言ったことにちなんで、居場所を「はずのいえ」という名前に決めたようだ。

居場所と生活支援を併せ持つ拠点

はずのいえ立ち上げは、2017年に始まった生活支援体制整備事業にさかのぼる。九戸村保健福祉課地域包括支援センターの保健師でSCの河村侑乃さんは、同事業を推進する県の研修会で当財団の講師による講義を聴いてドキッとした。

「このままだと介護保険制度のサービスでは立ち行かなくなる。住民の方々の力で地域をつくっていかなければ」
さっそく当財団を講師に招くなどしながら、村主催で計9回フォーラムや住民勉強会を実施。村の全戸にチラシを配布し、自治会、民生委員、保健推進員、保育園の保護者会などありとあらゆる方面に勉強会への参加を呼びかけた。勉強会は、回を重ねるごとに「思い」のある人たちの集まりとなっ

ていった。

19年、勉強会を経て九戸村に協議体が21人のメンバーで発足。皆でことごと話し合いを重ね、目指す地域像を次のように打ち出した。

◆ 助け合い活動が定着し、困ったときに「すけでける（手伝って）」と声を上げやすい村

◆ 子どもから大人まで、多世代が気軽に集まり、声をかけ合える**通いの場**がある村

◆ ゴミ出しや除雪、買い物などの身の回りの**生活支援**が充実している村
協議体では「活動を立ち上げて、住民の賛同が得られなければ」「もっと地域に出て助け合いの必要性を広めよう」と意見が出て、今度は全戸対象でニーズ調査を実施。農閑期に全6小学校区で勉強会を開くと、計132名の住民が参加した。住民から多く出た意見は、「謝金が決まっているとお互

い気を遣わずに済むのいい」というものだった。有償ボランティアの仕組みは住民の気持ちにじっくりとはまった。

そうして誕生したのが生活支援ボランティア「ご近所すけっ隊」だ。周知も兼ねて、名前は住民投票で決めた。メンバーは、包括が開催する生活支援ボランティア養成講座を受講してから活動し、利用料は1枚100円のチケット制とした。

同年10月には、みんなで新潟市の居場所「実家の茶の間・紫竹」を視察。目指す地域像の中にある通いの場（居場所）をつくり、そこをすけっ隊の拠点にもしよう！とみんなの気持ちが固まった。

場所は公募し、応募してくれた空き店舗3軒から今の場所に決まった。やがてコロナ禍となったが歩みを止めることはなく、元靴店だったこの空き店

舗に商品の靴が残されていたため、

「ご自由にお持ち帰りください」と住民の注目を集めて存在をアピール。協議体が店内の片付けや掃除を始めると、塗装屋さんがペンキを無償で提供し、住民らが壁や床を塗装するなど手を貸してくれるようになった。そして21年9月1日、公募して名前を決めた居場所「ほずのいえ」がオープン。20年から協議体に参加してきた上村勝己さん（72歳）は、現在ほずのいえを運営する「友の会」会長でもある。

「この地域は、子どもが独立して家を離れている世帯が多い。店もどんどん閉じていく。住民が困る時代になるから、住民同士のつながりと助け合いを根づかせる必要があると思いました」友の会は上村さんをはじめ60〜70代の28人が担う。ほずのいえが開設するや、すけつ隊にはさまざまな困り事が寄せられるようになった。

ネイルの日、カレーの日…… 若い世代とも一緒に過ごす

「私はここが開いている日はいつも来ているから、皆勤賞かな」と楽しそうに話すのは、ほずのいえの近くに住む安藤サチ子さん（83歳）。

何度か足を運ぶうちに居合わせた人といつの間にか話が弾むようになった。漬け物や餅、野菜などを持ち寄って、みんなで味わう楽しさは格別だ。「いつも何にも話さずコーヒーだけ飲んで帰る男の人もいる。その人なりの過ごし方でいいんだよね」。今、安藤さんは「この場所があつてよかった」としみみ思うのだ。

榎本アキさん（85歳）は「一人暮らしですけど、ここがあるので安心です」と語る。ほずのいえに榎本さんの姿が見えないとき、ここでは「どうしたのかしら」「どこそこで見かけたから、



ほずのいえに来ていた、左から安藤さん、榎本さん、及川さん

もうすぐ来るよ」と皆が気にかけてくれる。役所に提出するような複雑な書類も、包括の人などが来ているときに丁寧に書き方を教えてもらえる。楽しみにしているのは「ネイルの日」。これは誰ともなく「若返り企画ってやってみたいよね!」「爪きれいにするべ!」「誰かマニキュアできる人いない?」という具合に始まった。自分の爪がお



「ふれあいカレーの日」は子どもたちも大喜び



高校生も来て一緒に楽しむ「ネイルの日」

しゃれに変身して、夏休みには女子高
校生が参加することもあり、一緒に美
しさを磨くのはとても楽しい。根本さ
んにとって、ほずのいえは大きな家族
のような存在だ。

ふと棚に目を見ると、製作中のかご
がいくつも並んでいる。「これも、誰
ともなく『何か作りたいよね』と言
い出して、小物作りが始まったんですよ
と話すのは、「友の会」メンバーで保
健師の及川洋子さん（71歳）だ。さま
ざまな手作りの小物たちが、ほずの
いえ工房から誕生してきたが、特定の
誰かが講座やプログラムを決めている
のではなく、自然発生的に楽しいこと、
おいしいことなどが始まるのだ。

特に人気があるのは「ふれあいカレ
ーの日」だ。65歳以上1000円、65歳
未満3000円、高校生以下は無料で、
各自がお米を1合持ってきて、みんな
が交代で調理などを担当。手作りおや

つも振る舞われ、夏休みなどは子ども
たちも多数参加して大にぎわいだ。地
元企業からは、地場産業であるプロイ
ラーの鶏肉やお米、カレールーなどの
寄付も寄せられるようになっていく。

地域で暮らす良さを再発見

「ご近所すけっ隊をお願いしたら、こ
こで暮らす良さが増してきました」と
話すのは、道地彰子さん（70代）だ。



道地さん
夫妻

昨年病気を発
症し、手がこ
わばって家事
をするのに支
障が出てきた。
自治会の会合
ですけっ隊を
知り、掃除を
依頼してみた
ら、近くのウ

オーキング教室で顔なじみの2人が現れた。「最初は驚きましたけど、近所の方が来てくださるのは安心です」この日も2名体制でてきばきと作業し、あつという間にリビングもトイレもピカピカに。「少し時間が余れば一



すけっ隊メンバーの
松本さん(左)と七戸さん(右)



トイレ掃除の様子

緒におしゃべりができるので楽しくて」と道地さん。すけっ隊の七戸ルミ子さん(70歳)と松本貴美子さん(68歳)は「地域の行事から梅干しの漬け方までお互い情報交換できます」とにっこり。

傍らの夫・清さんは「僕も家事ができなくてはならないけれど、妻の要望に十分応えられていないようで、すけっ隊に来ていただけるのはありがたい」と笑う。「今、包丁も持てなくて」と彰子さんが言うと、七戸さんと松本さんがすかさず「今度、ご夫婦で一緒にやりませんか? 食材を切るなどは私たちがして、味付けはやっていただくのか」と提案。会話はどんどん盛り上がっていった。

「やるべ、やるべ」 住民の力で可能性が広がる

ほとんどのいえは地域にとってどういう

存在なのか、あらためて聞いてみた。協議体立ち上げから伴走してきた河村さんは、「行政が主導するのでなく、最初から住民さんたちの話し合いによって進めてこられたからこそ、『やるべ、やるべ』と楽しく活動されているのだと思います。頼もしいですね」。

さらに「皆さん、見返りを求めず自分の時間を使って地域のために活動されている。尊敬します」と喜びを語る。

看護師として病院に勤務後、さまざまなボランティア活動をしてきたのが大村貞子さん(79歳)だ。「私自身も含め一人暮らしの人が結構いて、集える場所があったらと思っていたので協議体に参加しました。家にこもっているよりずっと楽しい」。大村さんはすけっ隊のメンバーでもあり、話し相手やゴミ出しなど幅広い内容を引き受けている。ほかに、介護予防教室で血圧を測ったり、子どもの登下校の見守



関係者の皆さん。左から、小野寺さん（包括所長）、大村さん、上村さん、及川さん、河村さん（SC）

りをしたりと各方面で大活躍中だ。「活動周知は口コミが効果的なので、宣伝担当です（笑）。あんたがいてよかった、と言われるのが何よりうれしい」

昨年までSCだった及川さんは、今年4月からすけっ隊のメンバーとして活動を始めた。「もともと助け合いの精神がある地域ですが、有償の活動だと良い意味でみんなが割り切れて、助け合い活動がよりスムーズに広がるのを実感します」

上村さんは「今は基礎ができて徐々に前へ進んでいる段階」と語る。「膝が痛い、人前に出るのが苦手、また家族関係などそれぞれの理由で、こういう居場所に来られない人たちがいると思います。これからは少なくとも小学校区に1つくらい、歩いて通えるような居場所をつくっていったら」

地域包括支援センター所

長の小野寺さゆりさんは

ほすのいえ・ご近所すけっ隊

<ほすのいえ>月・水・金・市日（7のつく日）10時～15時半 参加費 100円（飲み物代）、小学生以下無料。ふれあいカレーの日、ネイルの日、包括主催の認知症カフェ等も開催。

<ご近所すけっ隊>ほすのいえを拠点とするチケット制（1枚100円×10枚綴り）の生活支援グループ。身近な困り事（ゴミ出し、草取り、話し相手、家事全般等）を住民同士で助け合う。活動メンバー26名、活動回数のはべ212回（2024年実績）。利用料は活動15分以内でチケット1枚、30分以内でチケット3枚、買い物代行1回でチケット5枚など。利用料の半分は活動したメンバーへの謝金、もう半分は事務費。

●連絡先／岩手県九戸郡九戸村大字伊保内7-14-1
電話 0195-26-8333（ほすのいえ）

「住民さんの活動はいろいろな可能性を秘めています。自律性がさらに高まってもっともっと面白くなりそうですね」と期待を寄せていた。

いいきき わくわく

子どもと一緒に 地域で輝こう



専門職がボランティアで子育てを応援

NPO法人みんなで子育てこもれびひろば（石川県白山市）

地域の親子を支えたいと、ボランティアで活動している専門職のグループがあります。今回取材した「親子のつどいこもれびひろば」（以下、こもれびひろば）では、助産師や保育士、幼稚園教諭などが中心となって活躍。地域の親子にとって心強い存在になっています。

（取材・文／石橋 千春）

金沢市の南西部に隣接する白山市は、霊峰白山をいただく自然豊かなまち。なかでも鶴来地区は白山の玄関口として知られる。こもれびひろばは、この地区の中心部にある「つるぎショッピングスクエアレッツ」の1階に入っている。この総合施設はスーパーや専門店、コミュニティ機能も備わっており、地域の人たちが集う場所。こもれびひろばを開催するのにぴったりの環境だ。

●助産師、保育士がいる安心感

こもれびひろばは、妊娠中の女性、子育て中の親と0～2歳の子ども、そして孫育てをしている

祖父母も対象に、原則毎週火・水・木曜日の9時から12時半に開催しており、1日におよそ5～10組の親子が訪れる。平日に來ることができない人のため、月1回日曜日にもオープン。「助産師によるベビーマッサージ」や、女性なら誰でも参加できるおしゃべりの場等の催しも実施している。参加は無料だ。

取材当日は恒例のイベント「親子で楽しむリズムと絵本のひろば」と育児相談会の日で、10組ほどの親子が参加していた。こもれびひ



外からでも
入りやすい雰囲気の
こもれびひろば



こもれびひろばには遊具やおもちゃがたくさん

「この子がお腹にいる頃から、外から見て楽しみにしていた」という。はじめは児童館のような施設かと思っていたが、来てみると「スタッフの方とも話しているママたちとも話しやすい雰囲気。助産師さんや保育士さんもいてくれるので安心です。私の顔もすぐ

ろば代表で自身も2児の親である助産師の平田彩夏さん（37歳）によると、イベントと相談会を一緒にやることで参加率も高くなるという。「今日はこちらで用意したピンクのスクarfをチューリップの花に見立て、音楽に合わせて手のひらで握ったり開いたりしながらみんなで楽しみました。赤ちゃんはお母さんと一緒に、2歳近くなると自分でやる子もいます」と平田さん。参加していた赤ちゃん連れのお母さん（30代）に話を聞くことができた。

●長期のケアこそ必要

に覚えてくれて、相談しやすいです」。さらに「自宅ですつと子どもといると気が滅入ってしまうこともあるので、ここに来るとリフレッシュできます。子どもも、違う環境でほかの子を見たり、おもちゃを触ったりすると気分が変わるようです」と、週に1回は通う常連になった。



平田さんがこもれびひろばを開設したのは昨年

8月。それ以前は、助産師として大学病院のNICU（新生児集中治療室）や地域の基幹病院に勤務し、大学の助教として助産師の育成に携わった時期もあった。そんな中、コロナ禍となり現場でのお母さんたちとの接点がなくなった。懸命に頑張るお母さんたちに命の現場で寄り添い、自身も励まされてきただけに「自分が何をしたいのか問い直す機会になりました」と振り返る。

以前、母乳外来に通うお母さんたちのさまざま

小さな子も
おもちゃに夢中



こもれびひろばは石川県の「赤ちゃんの駅」にもなっており、授乳室やおむつ替えの部屋を完備

後のケアが足りないと感じた。長期にわたるアフターケアが必要だとあらためて思い、保育士や幼稚園教諭と協働して、子育て家庭と伴走できる拠点をつくりたいと考えた。

平田さんはまず友人の山下美佳さんに声をかけた。山下さんは、平田さんが勤めていた病院で子どもを出産した縁で知り合った。「話を聞いてうれしかったし、ウキウキしました。それまで子育て中心の生活でしたから」と笑う。活動立ち上げ時、山下さんは海外在住だったが、会場探しや書類作成などで平田さんをサポート。現在は帰国して中心メンバーの一人として活躍中だ。

次に声をかけたのが田島さん。幼稚園教諭の仕事を退職後、現在も勤務している金沢の子育て支援センターで、利用者だった平田さんと知り合った。「しっかりした活動コンセプトでしたし、私を頼ってくださいるので、もう少し

しここでも頑張ってみよう」と。この歳になってもまだまだ学ぶことがあります」。子育ての仕方は時代によって変わることもあるが、新旧世代の橋渡し役としても自分の出番があると思っている。一方、平田さんは「専門職としてだけではなく、人生の先輩」と田島さんを尊敬している。

● 対話することで答えを見つけてほしい

総合施設「レッツ」の運営スタッフ原さんにも、こもれびひろばについて聞いた。「ここのテナントを募集したとき、うちの女性スタッフが『自分が子育てしているとき、こんなところがあればどれほど助かったか！』と言うのを聞いて、なるほどと思いました」。今ではこもれびひろばの応援団の一人だ。「このまちにも少子化や過疎化という課題がありますから、若い家族が定住してくれるとまちが活気づきます。お祭りのときにこのスペースを親子の休憩所として使わせてもらったりして、助かっています」と喜ぶ。

原さんの妹である保育士の堀口さんも中心メンバーになった。堀口さんは保育園を退職したばかり

りだったが、原さんから話を聞いて手を上げた。「子どもたちともっと触れ合っていたかったし、平田さんの考えを聞いて勉強になると思った」からだ。「ここは、参加している皆さんに『教える』のではなく、対話を大切にしている、その先進的な姿勢が素晴らしいと思っています」。それを受けて平田さんも「参加者の方から何か質問されても、こちらからすぐに答えを返すことはしません」と話す。例えば「夜の授乳をやめようかな」と悩むお母さんには、その良し悪しではなく、「どうしてそう思ったの?」という問いかけから始めるという。そうすることで、例えば休息の取り方に問題があるのかも、と分かり、適切なアドバイスにつながることもあるからだ。そうしたアプローチは専門職ならではの強みだろう。

これは、メンバー間で大切にしている「子育てに正解はないから、1つの価値観を押しつけない」という姿勢にもつながっている。悩みに耳を傾け対話することで、参加者自身が答えを見つけられるようになってほしいと思っているそうだ。

*

*

*

取材の最後に平田さんがこんなエピソードを話してくれた。

この活動が始まったばかりの頃、平田さんの母親が大病を患った。幸い現在は回復されたが、そのときは活動のことや自分の子どもたちのことで、心にまったく余裕がなくなっていた。そんなとき、田島さんや堀口さんの存在に救われた。「何も言わなくても、ドンと構えていてくださいました。支援のベテランがそばにいてくれることがどんなにありがたかったか」。平田さんにとっては、専門職による支えの力強さを我が身で実感する出来事となった。

「助産師は出産だけでなく、すべての女性の心身に寄り添う職種。お母さんたちには、子育てが一段落した後も『元気にしてる?』ってここに遊びにきてほしいし、私もそれを見守っていききたい」。

平田さんは、子育て家族の先も見ている。



前列左から、平田さん、山下さん。後列左から、「レッツ」運営スタッフの原さん、中心メンバーの堀口さん、田島さん

応援ありがとうございます！

「地域助け合い基金」助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、さまざまな世代・人々が参加する地域共生社会実現のための活動を支援している「地域助け合い基金」。今月号は、無料学習支援、移動支援、居場所の取り組みをご紹介します。なお、このほかの助成先団体の活動報告も財団ホームページに随時アップしていますので、思いが詰まった多彩な活動をぜひご覧ください。

東京都八王子市

被災地へオンラインで無料学習支援 放課後の居場所と連携も

start upあさひ塾

助成金額 14万6000円

東京都八王子市のstart upあさひ塾は、さまざまな理由で学習塾に通うことが難しい小中高校生を対象として、毎週2回2時間の無料学習会を行っています。講師は

大学生や社会人、シニアの方がボランティアとして在籍し、学校の予習復習、定期テスト対策、また希望者には各校定への挑戦もサポート。社会福祉協議会や地域の子ども食堂と連携して学習会のチャ



子どもも講師も熱心に取り組むあさひ塾の様子

シを配ったり、学習会では子ども食堂を紹介しています。

昨年1月の能登半島地震に際し、自分たちも何か役に立てることがあるのではという思いから、遠隔での無料学習支援に取り組むことにし、被災地の社会福祉協議会に連絡を取り準備を進めました。対象は中学3年の受験生で、夜の時間帯に2時間の学習会を実施し生徒も講師も熱心に取り組みました。その結果、高校合格といううれしい報告を受けたそうです。また、放課後教室を運営している団体と連携して学習面のサポートに入り、子どもたちの素直な声を聞くこともできたということです。

今回の助成金は、遠隔での支援に必要なオンライン会議システムの契約や教材、講師の謝金、居場所での講師の交通費補助等に活用されました。

これからも大変な環境で過ごしている子どもたちのために活動を継続し、地元にもさらなる地域貢献ができる体制や連携を強化していきたい、と報告をいただきました。



2台目の車とドライバーさん、利用者さん

移動支援を一層充実 高齢化するまちでつながり・見守り

静岡県富士宮市

杉田3・4区街づくり協議会

助成金額 15万円

「杉田3・4区街づくり協議会」は、地域の移動手段に困っている高齢者世帯を対象に2023年からボランティアドライバーによる通院、買い物などの移動支援活動を行っています。地元企業の協力で車をリースし、1台で活動を

スタートしましたが、坂が多く、市街地から離れており、高齢化率の高いこの地区では、移動支援のニーズは高くなる一方です。

そこで、今回の助成金は2台目の車のリース代として活用されました。

コロナ禍以降は人のつながりが激減し、高齢化・孤立化

がますます進みましたが、移動中は利用者との会話を通じて人と人とのつながりができ、さりげない見守り効果もあります。利用者からも、気軽に外出できるように、日常生活の円滑化、ストレス発散、地域住民同士の情報交換の場として大変喜ばれているそうです。

今は無償の活動であり、就労している高齢者も多いことなどから、月1回だけでも活動可能なドライバーを多数確保する作戦を展開しています。また、歩道を整備・清掃し、できるだけ安全安心に散策できるようにしたり、休憩可能なベンチの設置等をスタートしようと計画しているのと、そのためにより多くの既存団体や個人に声をかけ、協力し合っていきたい、と報告をいただきました。

京都府宇治市

認知症高齢者の生きがい、社会参加 地域の見守りへとつなげていく

北畠ラルゴ木幡

助成金額 10万9000円

「北畠ラルゴ木幡」は、地域の認知症高齢者の孤独死を小

地域包括ケア会議で取り上げ、何かできなかったかという地域の思いから、地域包括支援センター、介護保険事業所と連携し、住民の見守りを地域全体で行うための話し合いから始まりました。

公園と同じ敷地内の集会所で話し合いを持ち、公園を訪れる人に取り組みを知ってもらうための声かけなども行い、お互いに気にかけて合えて、声かけ合って、安心して暮らせる地域づくりの一步として、昨年11月1回「ラルゴカフェ」を開催し、認知症になっても高齢になっても役割を持ち、年齢に関係なくみんなの居場所にしよと取り組んでいます。



ラルゴカフェでのひととき

「地域助け合い基金」 状況のご報告

地域で困り事を抱え、孤立する人たちが全国で増え続けています。引き続き、本基金を通じた皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。

(8月15日 当財団ホームページ開示時点)	
◎寄付受付額	431件 2億907万7637円
このうち遺贈基金より1億7000万円を供出	
◎助成実行額	1337件 2億319万8268円

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、助成可能な金額もご覧いただけます。寄付や助成をお考えの方は参考にしてください。



クレジットカード
決済ページ



財団ホームページ内
基金関連ページ

●基金に関する情報、およびクレジットカード決済は、上のコードもご利用ください

基金に関するご意見・お問い合わせ

地域助け合い基金
担当

電話：(03) 5470-7751

FAX：(03) 5470-7755

メール：tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

今回の助成金は、カフェで使用するための備品や手動コーヒーマル、ケトル等の購入、チラシ作成費等に活用され、認知症の方にコーヒーマ豆を挽いてもらうなどしています。「些細なことでも話ができる場所、定期的に開催している場所、誰もが気兼ねなく立ち寄れる場所が提供できる」

かけになりました。まだまだこれからですが、楽しく集える場所を気楽に垣根を低くして取り組んでいきます。お互いが助け合い、励まし合って、ラルゴカフェが心の拠り所となることを願っています」と報告を寄せてくださいました。

定年、 その先へ

地域とのつながり方

5

一般社団法人定年後研究所所長

池口 武志



大手広告代理店から地域 包括支援センターへの転職

先月号では、大企業に入社し、終身雇用を前提に働いてきた会社員が、定年などを契機に徐々に地域社会での活動や、社会的弱者と言われる人の支援に新たな生きがいを見出す意識と行動変容のプロセスのさわりをお話しました。

今月号では、そのロールモデル（お手本）として大手広告代理店から地域包括支援センターへ転職された八田一郎さん（取材時57歳）をご紹介します。

八田さんは大学ではマーケティングを学ばれ、新卒後入社した広告代理店での仕事にも大きなやりが

いを感じながら、多忙な毎日を送られていました。

そんな八田さんの心を揺さぶるきっかけになったのが、当時53歳で受講した「社内のキャリア研修」でした。そこでは「60歳以降どのように生きていくのか？」がテーマの一つでもあり、これまでも薄っすらと八田さんの脳裏にあった「いずれは企業の利潤追求ではなく、地域社会のために汗をかきたい」との思いが急速に色濃くなってきたそうです。

かねてより抱いていた「75歳までプロとして現役でいたい」との将来願望とも相まって、八田さんは

（いけぐち たけし）1986年日本生命に入社。本部・現場で長く管理職を務め、多様な人材育成に関わる。2021年定年後研究所所長就任後は、シニア就労促進に関する企業取組、シニアの意識調査に従事。還暦で桜美林大学院老年学修士課程を修了。厚生労働省生涯現役社会の実現に向けた検討会委員、企業から福祉への人材供給に関する調査研究事業検討委員、早稲田大学キャリア・リカレント・カレッジ講師、シニア社会学会理事等を通じて、シニアの可能性の拡がりを志向。

早期退職を決断し、「本格的に学び直して、そのことを武器に新しいキャリアにチャレンジしたい」と55歳で社会福祉士の養成機関に入学されます。1年半に及ぶ充実した学びの期間を経て、晴れて資格取得後、現在の地域包括支援センターに思い切って転職されることになったのです。八田さんは1年前の再就職を振りかえって「給与水準は下がりましたが、迷いはなかったです。福祉も広告も人とのコミュニケーションが大切であり、これからは福祉のプロとして長く社会に貢献していきたいと思いました」と



八田一郎さん

当時を述懐されました。

地域包括支援センターでの1年間は多忙を極めました。ひきもきらない窓口来訪者の相談対応、要支援認定者のケアプランの作成、社会福祉士としての権利擁護業務は、これまで見えていなかった世界に直面することで肉体的にも精神的にも負担感は大きかったそうです。ただ、「自分はもともと人から感謝されることがやりがいの源泉なんだと改めて気づきました。ご利用者様によるこんでいただく瞬間に、とても大きくやりがいを感じるのです」と満面の笑みで語っていただきました。

また、徐々にはあるそうですが、民間企業で培ってきた「お客様ファーストの精神」や「業務の効率化・IT化」などの面で、組織開発にも貢献できることに大きなやりがいを感じておられるようです。八田さんの素敵なキャリアチェンジの物語は、定年前後期からの仕事の意味合い、やりがいに悩む多くの中高年会社員の鏡になるのではないのでしょうか。



オープニングフォーラム

「みんなの参加で地域共生社会を実現しよう」

人と人とのつながりは、いかに心や体、そして地域に好影響を与えるのか。幅広く多様な取り組みから、誰もが出番と役割を持てる地域共生社会の実現に向けて、豪華なパネリストのそれぞれの立場から事例を含めて語ってもらいます。

進行役 宮本 太郎氏

中央大学法学部教授

登壇者 瀧 靖之氏

東北大学スマート・エイジング学際重点研究センター センター長、
東北大学加齢医学研究所教授

秋山 正子氏

暮らしの保健室室長、(認定特非) マギーズ東京センター長

稲葉 ゆり子氏

たすけあい遠州代表

菅野 浩之氏

(一社) 全国信用金庫協会常務理事

特別トーク

- 駒村 康平氏(金融と福祉の連携)
- 是川 夕氏(外国人との共生)
- 近藤 克則氏(孤立予防と社会参加、助け合い)
- 杉山 孝博氏(認知症の理解と対応)
- 田中 滋氏(地域共生社会と地域包括ケア)
- 辻 哲夫氏(生活支援コーディネーターと協議体とフレイル予防)
- 中村 秀一氏(これからの社会保障)
- 藤原 佳典氏(多世代交流の意義と社会参加)
- 松岡 洋子氏(住民の地域参加とウェルビーイング ～国際比較の視点を交えて)

学ぼう編

都市部を中心とした近隣助け合いの広げ方／小規模自治体で助け合いをどう広げるか／助け合いへの参加・創出に向けてのアプローチ手法／誰でも受け入れる居場所にするには／認知症の人と共に生きる地域づくり／子どもの育ちを地域で応援しよう／企業と連携した地域づくりの進め方／シニアの地域参加の広げ方

語ろう編 ※ライブ配信のみ

生活支援コーディネーターと協議体による地域づくり 一悩みを出し合い様々な解決方法を共有しよう／有償ボランティアによる生活支援(移送含む)の具体的な立ち上げノウハウ／助け合いの社会的価値とつながり方

- ◆オンラインフェスタ概要は、表紙裏も併せてご参照ください。
- ◆さらに詳しい内容は、財団ホームページ内オンラインフェスタ特設ページからもご覧いただけます。

<URL><https://festa.sawayakazaidan.or.jp>

新しい ふれあい社会づくりに 向けて

ふれあい

いきがい

助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。

さらに、全国自治体が地域支援事業で取り組んでいる
住民主体の助け合いの地域づくりも強力に支援しています。

どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

- **ご支援ありがとうございます。**

さわやかパートナー（賛助会員）・
ご寄付者の皆様のご紹介

- **NEWS & にゅーす**

- **さわやか活動日記**（抄）



ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。新規ご入会の会員の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

(敬称略) (2025年7月1日～7月31日財団受付分) ※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日にずれが出て掲載時期がずれる場合がありますご了承ください。

さわやかパートナー個人 (46件)

(都道府県別50音順)

北海道	増玉県	千葉 春彦
加賀谷 之治	佐伯 正孝	中澤 将人
宮城県	為ヶ谷 喜一郎	本多 則恵
菅原 宏之	千葉県	森脇 亜人
福島県	杉谷 充行	神奈川県
三浦 彰	杉本 類子	佐久間 博
茨城県	寺尾 徹	藤田 和弘
平沢 光子	松下 明子	山本 千恵
広瀬 貢	森川 和子	吉田 憲正
栃木県	東京都	富山県
橋本 玲子	石原 順一	田中 寿和
正岡 太郎	宇野澤 虎雄	福井県
群馬県	加藤 洋一	武藤 功士
井上 謙一	黒瀬 義郎	長野県

竜野 泰一	兵庫県	愛媛県
岐阜県	佐野 正明	高橋 敦
河合 俊宏	多田 睦美	高知県
坂口 正恭	名倉 啓恵	三谷 英子
静岡県	岡山県	佐賀県
鈴木 明与	神田 典治	江口 陽介
脊古 光子	村松 章子	大分県
田中 昭彦	山口県	杉森 哲
平田 厚	池本 君子	

さわやかパートナー法人 (7件)

(50音順)

JCRファーマ株式会社
医療法人財団俊陽会古川病院
NPO法人たすけあい大田はせさんず
土屋建設株式会社

株式会社東京映画社
日本製鉄株式会社
宮崎精鋼株式会社

一般ご寄付 (2件)

(50音順)

藤本 裕一郎 (3万円)
社会福祉法人松前町社会福祉協議会 (3千円)



NEWS

& にゅーす



2025年度 「全国交流フォーラム」を 開催しました

7月28日、「2025年度さわやか福祉財団全国交流フォーラム」を東京都墨田区のKFCホールおよび第一ホテル両国にて、第一部・第二部の2部構成で開催しました。昨年に引き続き、

全国のご支援者の皆様をはじめ、活動実践者の方々や、住民主体の地域活動を積極的に応援してくださる行政・企業等関係者の皆様、さわやかインストラクターなど、200名以上の方々に猛暑の中ご参加いただき、活気あふれるフォーラムとなりました。

第一部・さわやかフォーラム

◆全体報告

はじめに、清水肇子理事長が「地域共生社会と助け合いの価値」と題して全体報告を行いました。当財団の活動



全体報告を行った清水理事長

の説明、そして私たちを取り巻く社会環境や社会課題への認識を踏まえ、地域の仕組みづくり、住民主体の地域づくりとは何か、超高齢社会においてどんな地域を目指すのかを問いかけて、地域共生社会の実現に向けて、住民主体のアプローチを重視する必要性を強調しました。また、最後に「堀田さんを偲び ふれあい社会を語る会」で放映した故堀田力前会長のメッセージを通じて、「誰もが自分を生かして、いきいきと幸せに暮らせる地域づくりを」一緒に進めてまいりましょう」と呼びかけました。

◆トークセッション

『楽しい』が結果介護予防に！

鶴山芳子常務理事がファシリテーターを務め、「一般社団法人ヒトナリ」代表・上田潤氏と、10数名からなる「宝島ガールズ」を代表して羽田恵子

さん、舟久保夏子さん、鈴木まつ江さんにご登壇いただき、トークセッションを行いました。

上田氏からは、「共に生きる文化の醸成」をテーマに、地域の孤独と孤立に向き合い、多世代交流拠点「ソーシャルセンター」からじま」を運営して、柔軟で開かれた地域づくりを実践し、多様な人々の居場所とつながりを創出していることが



宝島ガールズの皆さん
(左から、羽田さん、舟久保さん、鈴木さん)

ヒトナリ代表の
上田氏

紹介されました。ある地域住民の協力で、たからじまでの昼食会にたくさんの人たちが集まるようになったこと、たからじまに来る不登校の子の親の声をきっかけにフリースクールを開始したこと、また、昼食会で出される宝島ガールズの方々が作る料理がおいしいからと地元飲食店から声がかかり、今はそこで出されるお通しを作って店に届け、売上がたからじまの運営費になっていることなども報告されました。

宝島ガールズの皆さんはたからじまを通じた活動への思いとして、これまでに経験したことのない新しい活動に魅力を感じること、出会いによって人生が変わると実感したこと、無理せず自分のペースで参加できる安心感、そして大好きな料理で地域に参加しいきがいにつながっていることなどをいきいきと語りました。

皆さんは介護予防を意識して活動し

ているわけではありませんが、「楽しい」が結果として健康維持になっていることが伝わるトークとなりました。

上田氏からは、「超高齢社会はピンチではない。シニアをケアの対象ではなく、まちのプレーヤーにしていこうとが大事。理想のまちは自分たちでつくる、まちづくりの主体は自分たち」という貴重なメッセージが送られました。

◆ パネルディスカッション

「ふれあい助け合いを広げるためのネットワークをつくろう」

「ふれあい助け合いを広げるためのネットワークづくり」をテーマに、4名のパネリストをお迎えし、それぞれの地域における取り組みの報告を基にパネルディスカッションを行いました。

岐阜県各務原市の「八木山地区社会福祉協議会」理事・清水孝子氏は、「つ

ながる・ささえあうまちづくり 少子高齢化・人口減少のまちで」と題して発表されました。高齢者の悩み事である、身近で相談できる人、移動の問題、生活支援、日頃の居場所や困り事相談など、すべて地域にある拠点「ささえあいの家」で対応しているとして、「その人ができないことは支援する、



八木山地区社協の清水氏

できることは一緒に行う。本人の出番と役割を大切に、して地域に根差したあたたかな支援活動を実践している」と報告しました。

宮城県大河原町の「NPO法人ほっとあい」副理事長（東北ブロックさわかインストラクター）・渡邊典子氏は、「ありたい生活の支援のネット（助け合い活動の役割）」と題して、

支え合い助け合いの心で始めた「ほっとあいの場（ほっとあいの家）」について紹介しました。支援事例を基



ほっとあいの渡邊氏

に、自己決定の支援、信頼関係の構築、多様な関係者との連携など大切にしている視点が紹介され、住民主体の助け合い活動の重要性と、一人ひとりに寄り添った支援の意義を強調されました。

神奈川県川崎市の「認定NPO法人すずの会」理事長・鈴木恵子氏からは、地域ネットワーク「野川セブンの取り組み」と題して、その成り立ちから始まり、主な取り組み、主な取り組みとともに地域の中で見



すずの会の鈴木氏

えてくる「気になること」を多職種で考え、つながることの大切さが紹介されました。活動の効果として、情報共有、専門職や企業との連携、地域課題の早期発見と実践等があり、住民主導の地域づくりとネットワーク構築の重要性が実践的に示されました。

新潟県佐渡市の第一層生活支援コーディネーター・高野康栄氏は、「企業との連携をきっかけとしたつながりづくりの実践」と題して報告されました。移動販売を活用した地域コミュニティづくり、それに伴う移動販売の立ち寄り所選定や地域住民への説明に生活支援コーディネーターが関わり、地域に自然な居場所が広がっていることを紹介。効果として、地域住民の交流促進、住



佐渡市の高野氏

新潟県佐渡市の第一層生活支援コーディネーター・高野康栄氏は、「企業との連

効果として、地域住民の交流促進、住

民同士や移動販売ドライバーの自然な見守りによる緊急時の早期発見の例などがありました。あわせて、今年1月に開設され、生活支援コーディネートターの拠点にもなっている常設の居場所「ほっとテラス」についても紹介がありました。今後の展望として、企業との連携強化、地域住民の主体的な活動支援、企業連携と地域づくりを通じて佐渡市の地域課題解決に取り組んでいくことが報告されました。

第2部・さわやか交流会

会場を第一ホテル両国5階「清澄」に移して、さわやか交流会を開催しました。開会にあたり、企業や行政の方々、NPO・ボランティア活動に深いご理解とご支援を寄せてくださっている皆様をご紹介し、長く財団の活動を応援していただいている蒲原基道氏

（元厚生労働事務次官）による音頭で乾杯が行われました。その後は、皆様の交流、情報交換の時間となりました。限られた時間でしたが、全国からお集まりの皆様が地域や多様な立場を超えて、和やかな雰囲気の中、交流されました。

* * *

本フォーラムを通じて、当財団の活動と地域で活躍する高齢者や若者による世代を超えた楽しい交流や、住民主体で進められているネットワークづくりの実践をご紹介でき、多様な形でのふれあいと助け合いを広げていくためのヒントを共有する場になったことと思います。また当財団にとっても、皆様からのあたたかいご支援に勇気づけられるとともに、あらためて「新しいふれあい社会」という理念の実現に向けての思いを固める機会となりました。

（大石 敏晴）



第2部・さわやか交流会の様子

より強力にふれあい・助け合いを広げよう

2025年度「ブロック全国協働戦略会議」を開催



2015年から、さわか福社財団は全国のさわかインストラクターと共に各都道府県や市区町村と連携した住民主体の地域づくりを推進してきました。それから10年、生活支援体制整備事業により全国の市区町村に生活支援コーディネーター（SC）と協議体の体制ができ、課題もありながらもさまざまな成果も生まれています。“思い”をもって助け合い活動を立ち上げ実践してきたさわかインストラクターと住民主体の助け合いの推進を実践してきた当財団の助け合い推進パートナーは、共に「新しいふれあい社会の創造」を目指し、各都道府県ブロックメンバーとして活動しています。

7月29日、前日の全国交流フォーラムと同じ会場で、「ブロック全国協働戦略会議」を開催。全国からさわかインストラクターと助け合い推進パートナー約80名が一堂に会し、地域共生社会の実現に向けて、さまざまな情報を共有し、ふれあい・助け合いを強力に推進するために議論しました。

令和7年度事業を共に 「より強力に」

ふれあい・助け合いを広げよう

冒頭、清水肇子理事長があいさつとともに「互助を地域で進める重要性がますます高まっている。あらためて助け合い活動をネットワークの中で広げていくことも意識しながら進めたい」と趣旨説明を行いました。

続いて、各ブロックでさわかインストラクター・助け合い推進パートナーと当財団が共にふれあい・助け合い

を強力に推進するために、地域の実情に沿った9つの取り組みを鶴山から提案し、清水理事長からは新規プロジェクトの説明を行い、質疑応答で理解を深めました。

- ① 助け合い現場視察研修会（SC・自治体職員等対象）の開催
- ② SC・自治体職員や助け合い実践者等同士の情報交換会の開催
- ③ 市民フォーラム・勉強会の開催
- ④ 有償ボランティア（生活支援・助け合いの移動支援）創出の推進
- ⑤ 認知症の人も当たり前に参加する共生の居場所の推進
- ⑥ ④と⑤の実践事例動画作成の協力
- ⑦ ふれあい・助け合いを広げるネットワークづくりの推進
- ⑧ さわやかパートナーとのふれあいの会
- ⑨ いきがい・助け合いオンラインフェスタの開催 等

⑩ 子どもの未来応援プロジェクト他
①③は、この10年、全国の自治体でSCや協議体、自治体職員と連携して活動してきた中での気づき「異動や交替で中期にわたって継続して取り組む必要のある住民主体の地域づくりが途切れてしまう」「県内市区町村の取り組みは課題も手法も多様」「住民主体の助け合いを広げるには、思いを持った住民の言葉が心を動かす」等から提案したものです。SCと協議体を核とした働きかけによりさまざまな活動が広がってきましたが、有償ボランティア（生活支援、移動支援等）は立ち上がっているものの「家の中の家事支援には至らない」「移動のニーズは高いが不安でスタートできない」等の課題



9つの取り組みを鶴山から提案

も多く見られます。「居場所に認知症の人が来たが断った」「認知症になると家族が居場所に行くことを引き留める」などの例もあります。

助け合いの核となる④・⑤は、誰でも受け入れ家族機能として助け合い活動を実践してきたさわやかインストラクターのノウハウを生かし、⑥の動画も作成して推進していくというものです。

その他、⑦⑩についても説明を行い、⑨では参加と周知協力を呼びかけました。⑩については、清水理事長から遺贈による

ご寄付の趣旨説明と今後の取り組みについて説明しました。

さまざまな活動が広がる一方で人口減少は加速しており、介護予防とともに多様な主体との連携によるサービス創出が制度改正で推進されています。住民は百人百様。誰もが「役に立ちたい」という気持ちを持っています。地域でのふれあい・助け合いの中で自分を生かし尊厳を持って暮らし続けるために、多様な主体が協働してネットワークづくりを進めることを共有しました。

令和7年度 地域づくり政策と関連事業の動向

「介護保険制度の動向」地域づくり施策を中心に」と題し、厚生労働省老健局認知症施策・地域介護推進課地域づくり推進室長補佐の佐藤清和氏より、昨年8月に改正された地域支援事

業実施要綱や総合事業ガイドラインの改正、生活支援体制整備事業等の最新情報について講演していただきました。

「高齢者は必ずしもサービスを受けるだけでなく、地域に参加しながら役割を見つけることが重要。住民同士で支え合い、多様な主体の連携が進み地域づくりにつながっていくことも大切」とし、分野を超えた連携を促進する「生活支援体制整備共創プラットフォーム」等についても説明していただきました。

また、「高齢社会対策大綱と地域に期待すること」と題して、内閣府政策統括官（共生・共助担当）付参事官補佐の八重樫嶺央氏より、昨年改正された高齢社会対策大綱や「多世代参画による地域活力プラットフォーム構築調査事業」について講演していただきました。

お二方の講演後には参加者から活発

な質疑があり、佐藤氏、八重樫氏に丁寧なご回答をいただきました。

各地の取り組み紹介

当日参加者の中から、ふれあい・助け合いを広げるための取り組みを紹介したいという希望者12名に発表していただきました。移動支援、ICTを活用した見守り、企業と連携した居場所づくり、被災地での居場所づくり、被災地支援、商店街の仕組みと連携した有償ボランティア、子ども子育て支援、男の居場所、SC情報交換会など多彩な活動が発表され、参加者それぞれに刺激になった様子でした。

また、3名のさわやかインストラクターに発表をお願いしました。兵庫県神戸市の中村順子氏からは、理事長を務める認定NPO法人コミュニティ・サポートセンター神戸における地域の中の常設でこちゃまぜの居場所づくり



清水理事長が
グループワークをまとめた



テーマ別のグループワークで
地域への働きかけについて議論

への取り組みについて発表していただきました。石川県輪島市の中村悦子氏からは、地域に居場所（保健室）をつくって活動してきた経緯や能登半島地震等の災害下での活動について報告していただきました。石川県白山市で活動する吉村久美子氏からは、能登半島地震の被災地に入って行なった支援から見てきたことや課題と感じていること等について報告していただきました。

グループワーク 「地域にどう働きかけるか」

「今こそふれあい助け合いを積極的に広める時」をテーマに、各都道府県ブロックや市区町村で具体的に取り組みを実行するため、参加者がグループに分かれて知恵を出し合いました。

テーマは「A 助け合い現場視察研修会の開催」「B SC・自治体職員

や助け合い実践者等同士の情報交換会の開催（都道府県単位）」「C 市民フォーラム・勉強会等の開催」「D ふれあい助け合いを広げるネットワークづくりの推進」の4つ。参加者それぞれが希望するテーマに分かれ、活発なディスカッションを行いました。

全体発表で内容を共有し、最後に清水理事長が「ここで出されたたくさんアイデアを生かし、ブロックや地域へ一緒に働きかけていきましょう」とまとめました。

* * *

地域の実情に合わせて、財団、さわやかインストラクター、助け合い推進パートナーが一丸となり、ふれあい・助け合いのある地域づくりを強力に推進していこうと決意を新たにしました。

（鶴山 芳子）

さわやか活動日記(抄)

各地・各事業の取り組みをご紹介します



ふれあい推進事業

SCの基本学び、意見交換

「令和7年度

生活支援コーディネーター初任者研修」開催

■京都府

〔7月1日〕京都府で「令和7年度 生活支援コーディネーター初任者研修」が開催され、第1層・第2層SC、行政担当者、京都府担当者など約40名が参加。当財団と、奈良県葛城市第1層SCの田口研一郎氏が協力した。

最初に京都府からあいさつと現状報告が行われた。参加者への事前アンケートの結果も共有され、課題に感じていることとして、「何から取り組みばいいかわからない」「活動がどう評価されているのか分からない」という回答が多かった。

た。

財団から、「生活支援体制整備事業の基礎・SC・協議体の機能と役割」として講義を行った。高齢者を取り巻く日本の状況、地域包括ケアシステム、地域支援事業等について説明し、SCと行政の連携や地域ケア会議・専門職との連携の重要性、お互いさまで支え合う地域づくりを考える仕組みづくりについて話をした。

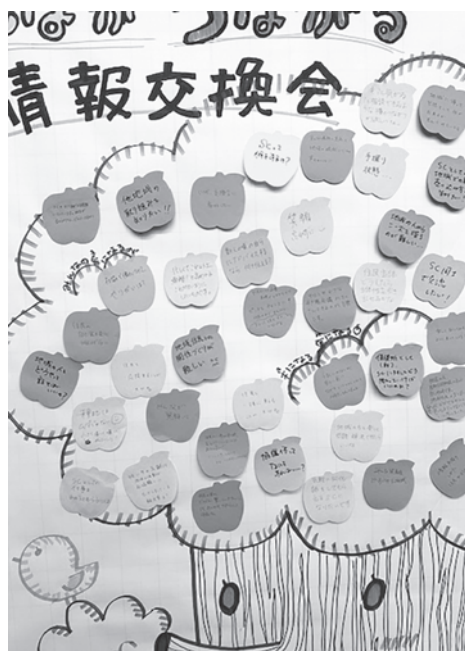
次に田口氏より「明日からの地域づくりが楽しくなる生活支援コーディネーター基本のキ」と題して事例報告。成果を意識しすぎると住民主体にならないことや、事業計画を明確にし

地域支援事業の活動報告は、このほかに当財団ホームページにもアップしています。ぜひご覧ください。

SCⅡ生活支援コーディネーター



京都府「生活支援コーディネーター初任者研修」の様子



SCが気になっていること・知りたいことを書いた「気になるツリー」

SCの業務を見える化する
ことが大切であることを伝
えた。

グループ交流は「講義や
事例報告を聞いた感想」
「地域でできそうなこと」
として、地域住民とコミュ
ニケーションを取りながら
進めていきたいという意見
もありニーズ把握の振り返

りや生活支援体制整備事業
について理解を深めた。

講評で田口氏は、「SC
が楽しくいられることが大
切。住民に寄り添い、住民
の問い合わせに興味を持ち
ましょう」と話した。財団
からは、住民とのコミュニ
ケーションについて「親身
になって、目を見て顔を向

けて話を聞くことが大切。
住民が意思決定して動くた
めにどういうフォローが必
要かを考えましょう」と呼
びかけた。

9月に開催が予定されて
いる「みんながつながる情
報交換会vol.5」に向

け、この日参加したSCが
普段気になっていることを
付箋に書いて貼った「気に
なるツリー」が作られた。
今年度も府と連携して積極
的な事業推進を支援したい。

(目崎 智恵子)

SCらの情報交換会 取り組み、悩み、よかったことを 共有して仲間づくり

■ 山梨県

〔7月16日〕山梨県ブロッ
ク主催の情報交換会が開催
され、県内のSC、市町村
職員、市社会福祉協議会職
員など約20名が参加、当財
団はアドバイザーとして協
力した。今年度、同ブロッ
クでは3地区（1回目・山

梨市、2回目・富士吉田市、
3回目・身延町）で情報交
換会を計画しており、この
日は1回目。ブロックメン
バーであるさわやかインス
トラクター（塚田好子氏、
長谷川すみ江氏、石井満代
氏）と、財団の助け合い推

進パートナー（南アルプス市・斉藤節子氏、同市・河野亜紀氏、市川三郷町・佐野泰史氏、昭和町・金丸由希氏）が話し合って企画。

佐野氏が進行を担当するなど、ブロック主体で実行された。県担当の依田総平氏は周知で協力し、当日も参加した。デスクは大きな円のレイアウトとし、上下関係をつくらず話しやすい雰囲気の中、次第に本音も出る活発な情報交換の機会となった。

目的は、県内のSCが集まり、日頃の活動の悩みや課題を聞き合う中で、一人で抱え込まず仲間づくりの場とすること。また、情報交換を通して、基本的な知識の習得や課題への対応事

例を共有するなど、SCとしての実践を振り返る場とすること。

オリエンテーションと自己紹介の後、情報交換①「生活支援体制整備事業の現状」として、これまでの取り組み（SC・協議体の体制、SCとしての活動等）を全体で共有した。

情報交換②は「SCとしての悩み、葛藤」。「説明会では住民の反応が良くと感じていたが、ふたを開けると人が集まらず悩んでいる」等の意見が出た。斉藤氏から「行政や社協から『協力してほしい』など住民に『お願い』をしていませんか？」と良い質問が出て、そこから「住民主体の活動をどう広げるか」につ

いての意見交換となった。

「住民自身が気づき、動くまで声をかけながら待つことも大切」「1つの事例が住民の心を動かすときがある。SCが地域のエピソードを紹介しながら理解者を増やす仕掛けも効果的」「住民自身が大切にしていくことは自然と続く」など、住民主体を推進する深い議論が行われた。

財団から、課題だけでなく「SCや協議体の活動でよかったことは？」と質問してみたところ、「最初は他人事のように参加していた人が、住民同士で話し合う中で、自分の地域の出来事を我が事として捉え、自分にできることは何か主体的に考えるようになった」



山梨県ブロック主催の情報交換会の様子

「地域の中で人と人がつながり、楽しさを皆で共有する瞬間に出会えた」「協議体メンバーから、活動を通して自分たちの地域がより

好きになったとの言葉が聞かれ、うれしかった」などたくさん意見が出た。

参加者からは、「県内のSC同士が気軽に悩みを共有できた」「あらためて、住民と一緒に考える事業でこれからも住民と向き合い

たいと思った」「今回の場のように、SCにとつての居場所を増やすことも大事だと気づいた」等の感想が聞かれ、ざっくばらんな情報交換会を実行した効果がうかがえた。(鶴山 芳子)

「令和7年度生活支援コーディネーター養成研修(基礎編)」ハイブリッド開催 事例紹介やロールプレイでSCが学ぶ

■北海道

【7月23日】「市町村に配置されたSCが自身の役割を理解し、高齢者のニーズや地域課題をアセスメントするための手法を知ること、地域で活躍できる人材の養成を図ること」を目的として、北海道主催「令和

7年度生活支援コーディネーター養成研修(基礎編)」が開催された。23・24日の2日間、会場とオンラインのハイブリッドで実施され、道内市町村のSCや行政職員等約80名が参加、当財団は1日目に協力した。

北海道厚生局による制度改正のポイント説明に続き、財団が「これからの地域づくりを地域の中から考える—SCと協議体の役割・機能—」と題して基調講演。初任者のSCも多かったが、住民主体の地域づくりを継続して広げること、そのポイントとして住民が「自分事」と実感できる仕掛けの方法等を各地の事例も入れながら伝えた。

グループワークを行った後の質疑応答は、財団だけでなく北海道のさわやかインストラクターや参加者も回答して、さまざまな方法があるということを前提に進めた。

続くミニ講義は、中田

亜由美氏(株式会社かんごぷらす代表取締役社長)による「地域に出るってどういうこと?—高齢者とのコミュニケーション」。

事例は、道内の土幌町社



北海道「生活支援コーディネーター研修(基礎編)」の様子

協から居場所の取り組みが紹介された。企業が場所を提供してさまざまな団体がその場を活用している取り組みだった。

ロールプレイは「支援を受けたくない」と思っている高齢者の自宅を訪問したときのやり取りをグループごとに実践。「地域にどう入っていいかわからない」という参加者も多く、さわかインストラクターが素晴らしいお手本となるなど楽しく行われ好評だった。終了後アンケートには、「つながりや関係を再構築しながら、住民の声を聞くことが大切なことと学びました。実践していきます!」「はじめの一步を踏み出す勢い、まずはやってみよう

という気持ち、同じ方向を見ている仲間がいるということ…。実践報告を通して知ることができ、ワクワクしました」「第2層SCとして活動する中で、最初から『困り事は何か』を聞く

地域全体で見守り・声かけ、できることを考える 美笹地区「あんしんネットワーク会議」

■戸田市（埼玉県）

〔7月23日〕戸田市で地域包括支援センター主催「令和7年度第1回戸田市美笹地区あんしんネットワーク会議」が開催され、当財団は講師として協力した。本会議は、高齢者やその家族など支援を必要とする人が、住み慣れた地域で安心して暮らし続けられるよう、地

ことが多かったが、まずは信頼されるよう雑談やその方が好きなことなどを聞いていくことも大切だと学びました」など前向きな感想が見られた。（鶴山 芳子）

域全体で見守りや声かけを行う「あんしんネットワーク」の活動を推進することを目的としており、関係する団体や地域住民など約70名が参加した。

あんしんネットワークには、町会・自治会、老人クラブ、民生委員、医療機関、小売店、郵便局、金融機関

など地域の日常に関わる多様な主体に加え、警察や市役所、教育機関、社協などの関係機関も会員として参加している。地域で「いつもと様子が違う」「困っていそう」といった高齢者等を見かけた場合は、本人や家族に包括を紹介するか、包括に直接連絡することで支援の第一歩につなげていく仕組みである。

今回は、あんしんネットワークの会員を対象として、日頃の見守り活動の中で感じている課題を共有し、できることを考えるために会議を開催した。

冒頭、同会議の会長より開会あいさつがあり、日頃からの見守り意識を一層高め、さらに安心して暮らせ



戸田市美笹地区あんしんネットワーク会議の様子

る地域を共に築いていくこととの重要性が語られた。

「美笹地区あんしんネットワークだより」の紹介に続き、財団から「助け合いの地域づくりについて」と題し、助け合いの必要性の説

明と居場所を拠点とした近隣の助け合いの事例紹介を行った。

その後の情報交換会では財団が進行役となり、参加者同士で地域課題や日頃感じていること、さらにその解決のためにできることについて意見を出し合い、グループで内容を整理・共有した。

発表では、「集合住宅では近隣同士の関わりが希薄で、情報が届きにくい」といった課題のほか、「多世代交流の機会が乏しいため、集会所など既存の施設を活用した場づくりが求められている」という意見が出された。あわせて、町内会館が十分に活用されていない現状を踏まえ、交流拠点と

して再活用する可能性についても提案があった。また、「地域内で生活支援を必要とする人と支援できる人とのマッチングの仕組みがあるとよい」「高齢者自身も役割を持つことで元気に暮らすことができる」という前向きな意見も寄せられた。一方で、「活動には関心があるが、万が一何かあったときが不安」との声もあり、これについては保険などで備えることが可能である旨の補足説明を行った。

最後に副会長が閉会あいさつとして、「今回の活発な話し合いを今後の活動に生かしていきたい」とまとめた。

今回の会議を通じて、地域課題や地域での助け合いの大切さが共有され、あんしんネットワークの見守りの中で課題がすくい上げられ、地域のさらなる助け合い促進につながるのではないかと感じた。今後の活動に期待したい。

(岡野 貴代)

所 事 だ よ り

●7月の全国交流フォーラムとブロック全国協働戦略会議の参加者アンケートを拝読した。皆さんが最近取り組んでいることなどを書いてくださっていて、ありがたいかぎりです。大切にしたい住民主体の動きをこれからも追っていきます。

みんなのひろ場



男性の

キャリアチェンジ

ハードル高い

高田 明さん

(地域包括支援センター・

地域支え合い推進員)

埼玉県
埼玉県

7月号巻頭言「地域づくりは、時に引き算で」は大変参考になりました。

また、池口武志さんのエッセイ「シリーズ 定年、その先へ」を興味深く読んでいます。

私自身35年間、カーディーラーに勤め、定年後、高齢福祉の世界にキャリアチェンジ。しかしその後の5年間はとてつらいものでした。現在は、地域包括支援センターで地域支え合い推進員をしています。9回裏ツアーアウトから逆転満塁ホームランのような、楽しい人生を過ごして

投稿募集

『さあ、言おう』は皆様の声を社会につなげる問題提起型情報誌です。
ぜひ皆様の声をお寄せください。

送付先

〒105-0011 東京都港区芝公園
2-6-8 日本女子会館7階
公益財団法人さわやか福祉財団
『さあ、言おう』編集部宛
FAX: (03) 5470-7755
E-mail: pr@sawayakazaidan.or.jp

います。

特に男性のキャリアチェンジ、そして地域に出ることは大変ハードルが高いと感じています。

すばらしいですね。大変なご苦労を経た今のご活躍は他の方へ大きなヒントにもなることと思います。ぜひ埼玉の地にどんな支え合いを広げていってください。



『さあ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さあ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。

さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人
年会費

Aコース 10,000円

Bコース 3,000円

法人
年会費
(1口)

Aコース 100,000円

Bコース 20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の優遇措置が受けられます。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の優遇措置が受けられます(さわやか福祉財団は所得税の税額控除対象の公益法人です)。

一般ご寄付を
いただく場合の
お振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団

郵便払込 00120-9-668856※

三井住友銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号2754574

みずほ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3383326

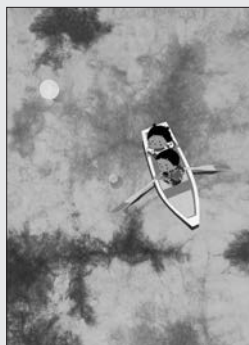
三菱UFJ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3731714

りそな銀行 芝支店 普通預金 口座番号1174297

※払込手数料不要の郵便払込取扱票をご用意していますので、お申し出いただければ郵送いたします。ただし、窓口にて現金(硬貨)でお振り込みいただく場合は、ゆうちょ銀行所定の取扱料金がかかる場合がございます。

*お問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。
電話 (03) 5470-7751 メール mail@sawayakazaidan.or.jp

表紙絵に はり絵・池田げんえい



「秋遊」

編集後記 ●「活動の現場から」は、東北の小さな村から。みんなでふれあい助け合うために、住民が話し合い、居場所と生活支援の仕組みをつくり楽しく活動しています(P4~)。●「子どもと一緒に地域で輝こう」は、専門職の皆さんが取り組む子育て支援活動です(P10~)。●池口武志さんのエッセイが好評です。ぜひご感想をお寄せください(P18~)。●「いきがい・助け合いオンラインフェスタ2025」、参加お申し込みをお待ちしています。(表紙裏、P20)。●『さあ、やろう』vol.28が発行になりました(裏表紙)。

助け合いを
広げよう!

新
ひとりごと

比嘉
政浩

協同組合は一人ではできないことを

一緒にやって実現するための仕組みです。

つながろう、つなげよう、の思いがあり、

出番や役割があることを大事にします。

これが真に世界に広がれば

戦争もできなくなるのでは。

足許で協同が広がるよう努めます。



●一般社団法人日本協同組合連携機構
(J C A) 代表理事専務

今年2025年は国連が定めた2度目の
国際協同組合年です。J C Aは戦後
初の協同組合横断の常設組織で、協
同組合の内外とつながるために取り
組んでいます。

「あきお」 9月号

通巻385号 2025年9月10日発行
(毎月1回10日発行)

表紙絵 池田げんえい

編集担当 塩瀬潔泉

取材協力 七七舎

イラスト 福島康子

レイアウト 菊池ゆかり

印刷所 日本印刷株式会社

発行人 清水肇子

発行元 公益財団法人さわか福祉財団

〒105-0011

東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階

Tel (03)5470-7751 Fax (03)5470-7755

E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp

<https://www.sawayakazaidan.or.jp>

Printed in Japan

無断複写・無断転載はご遠慮ください©

情報紙

生活支援コーディネーターと協議体の取り組みを考える情報紙

『さあ、やろう』vol.28発行!

7月開催の2025年度全国交流フォーラムにご参加いただき、ありがとうございました。

情報紙『さあ、やろう』vol.28では、交流フォーラムのパネルディスカッションで発表された4事例を「特集 ふれあい助け合いを広げるためのネットワークをつくりましょう」として掲載しました。ぜひネットワークづくりの参考になさってください。



※交流フォーラム全体の詳しい報告は、本誌「NEWS&にゅーす」(P23～)をご覧ください。

【vol.28目次】

- ◆ いそがしい・助け合いオンラインフェスタ2025
 - * プログラム テーマと登壇者のご紹介
 - * お申し込み方法 * 開催概要、お問い合わせ
- ◆ 特集 ふれあい助け合いを広げるためのネットワークをつくりましょう
- ◆ column「野川セブン」を視察!
- ◆ 『「どう遊ぶ?」QA』紹介
- ◆ Topics 助け合いを広めるために

◎『さあ、やろう』は、当財団ホームページからダウンロードできます。

財団HPトップページ→「ライブラリー」→「さあ、言おう・さあ、やろう」にお進みください

【お問合せ】メール post@sawayakazaidan.or.jp 電話 (03) 5470-7751